

# 野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第195号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成31年3月21日

ハイイロチュウヒ



2019. 1. 5 胆振管内厚真町

撮影者 新城 久 (札幌市北区)



## も く じ

全国鳥類繁殖分布調査で見えてきた日本の鳥の変化と北海道の鳥の変化	
NPO法人 バードリサーチ 植田 睦之 ……………	2
ここまでわかった北海道のカワウの渡り	
-赤いリングが教えてくれたこと-	
北海道カワウ研究会 会 長 大館 和広	
副会長 渡辺 義昭 ……………	5
「石狩鳥報」に見る石狩野鳥社会の一端	
札幌市北区 樋口 孝城 ……………	8
美唄市 藤巻 裕蔵 ……………	9
ロシア極東・鳥紀行(4)	
野鳥情報コーナー	
濤沸湖にて	
ハジロクロハラアジサシ47羽の記録 網走市 渡辺 恵 ……………	12
探鳥会ほうこく ……………	13
鳥 民 だ よ り ……………	15
表紙の鳥 (ハイイロチュウヒ) 札幌市北区 新城 久 ……………	15
探鳥会あんない ……………	16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<http://aigokai.org>)で閲覧することができます。

# 全国鳥類繁殖分布調査で見えてきた 日本の鳥の変化と北海道の鳥の変化

NPO法人 バードリサーチ 植田 睦之

今、日本の鳥の国勢調査「全国鳥類繁殖分布調査」がNGOを中心として行なわれています。バードリサーチが事務局を務め、日本野鳥の会など6団体共同のボランティア調査として、2020年の完成を目指し、全国約2,300コースのうち、7割ほどの調査が終わったところです。

この調査、1970年代と90年代にも環境省の調査として行なわれたので、今回あるいは以前の調査にご参加いただいた方もいらっしゃるのではないかと思います。

まだ調査の途中ですが、ここまでわかってきた鳥たちの現状やその変化についてご紹介したいと思います。

### 日本の主要種と北海道の主要種

この調査コースは全国に満遍なく設置されていますので、調査で記録された鳥を集計することで、「どこにでもいる」分布の広い鳥が何なのか知ることができます。今回の調査はまだ完了していないので、前回の1990年代の調査結果を見てみましょう。

結果を集計してみると、全国でもっとも多くのコースで記録されたのはウグイスでした。そしてヒヨドリ、キジバト、シジュウカラ、ホオジロと続きます。日本は山の多い国なので、家のまわりで一番多いスズメやハシブトガラスなどではなく、山に生息していて、平地にも生息できるような種が上位に来るようです。

では、北海道はどうでしょうか？ 全国とはずいぶん

違うメンバーが上位に来ています。1位はアオジ。全国では28位なので、その存在感は大きく異なります。そしてそれに続くウグイス、キジバトこそ全国との共通種ですが、その先はツツドリ、センダイムシクイです。メンバーも違いますが、北海道の上位に夏鳥が多く含まれているのも特徴的です。全国では最初に夏鳥が出てくるのは14位のヤブサメで、留鳥や漂鳥が上位を占めています。北海道は冬が厳しく、留鳥が幅を利かせられないため、北海道では夏鳥が上位にきているのかもしれませんが。

### 見えてきた日本の鳥の増減

1990年代と今回、両方調査できたコースで記録された鳥を比較してみるにより、近年分布が拡大したり縮小したりしている種がわかりました。

#### ・分布が縮小している鳥

今回一番分布の縮小率が高かった鳥はゴイサギでした(表1)。北海道ではあまり多くない鳥だと思えますが、本州では「バードウォッチングの基本種の1つ」ともいえる鳥です。そんな普通種なのですが、記録された調査地点が1990年代から半減していました。次に減っている鳥がヤマセミ、そして7位がコサギと、小型の魚を食べる鳥が上位に含まれていました。ブラックバスなどの外来魚の影響で小魚が減ったためなのか、増加している大型の魚食性の

鳥との競合なのか、あるいはオオタカなどの捕食者の影響なのか原因はわかりませんが、今の日本は小型の魚食性の鳥たちには住みにくい状況になってきているようです。

また、10位以下の鳥も含めて共通点をみると、コヨシキリなどの湿地や河原など開けた環境にすむ鳥やビンズイなど標高の高い場所にすむ鳥の減少も目に付きました。

・分布を拡大している鳥

反対に一番分布拡大が大きかったのはガビチョウでした。もともとは中国南部に生息していた外来鳥ですが、ソウシチョウとともに急激に分布を拡大させています。両種とも積雪や植生の制限からか、あまり北へは分布を拡げていないので(図1)、当面は北海道へ分布を拡げることはないと思います。

ほかの増加種としてはカワウやダイサギ、ミサゴといった大型の魚食性の鳥、サンショウクイやサンコウチョウといった夏鳥、キバシリ、クロジといった森の鳥があげられました。大型の魚食性の鳥は農薬等で1970年代に激減していたのが復活していて、それが続いているようです。夏鳥

表1. 全国鳥類繁殖分布調査で分布が増減した種の上位10種 (50コース以上で記録された種を対象とした)

縮小			拡大	
	種名	増減率(%)	種名	増減率(%)
1	ゴイサギ	-54	ガビチョウ	1843
2	ヤマセミ	-43	サンショウクイ	430
3	オナガ	-41	カワウ	408
4	コヨシキリ	-40	ソウシチョウ	377
5	ビンズイ	-40	キバシリ	135
6	バン	-38	ミサゴ	133
7	コサギ	-37	サンコウチョウ	118
8	コマドリ	-36	ダイサギ	115
9	コシアカツバメ	-33	クロジ	105
10	ハシブトガラ	-33	アオバト	105

は1980年代に減少が心配されていましたが、こちらも復活してきているようです。サンショウクイはそれに加え、南西諸島や九州に分布していた南方系の亜種リュウキュウサンショウクイが北上しているのも原因です。亜種リュウキュウサンショウクイだけでなく亜種サンショウクイも分布を拡大していて(図2)北海道でも記録され始めています。各地で見られるようになるかもしれませんので気にしてみてください。

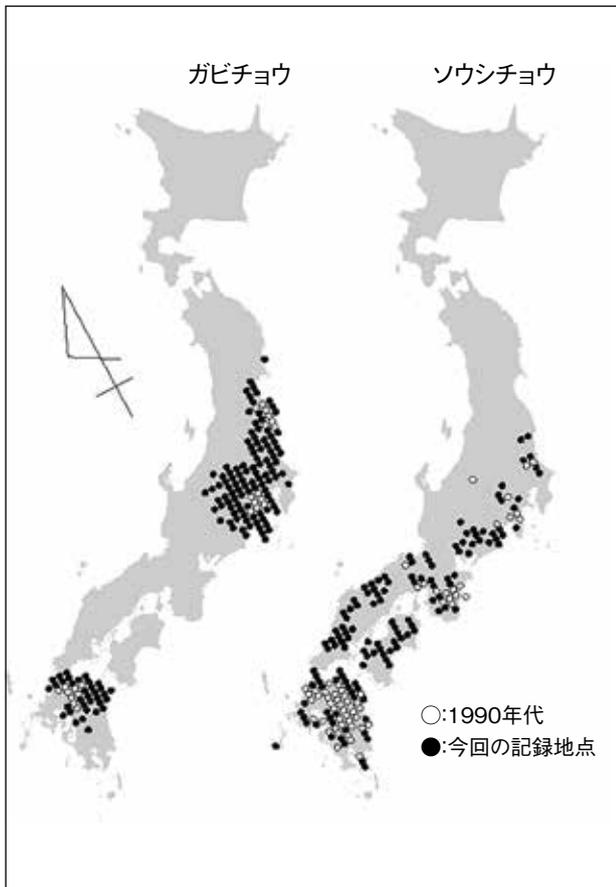


図1. 外来鳥の分布の変化

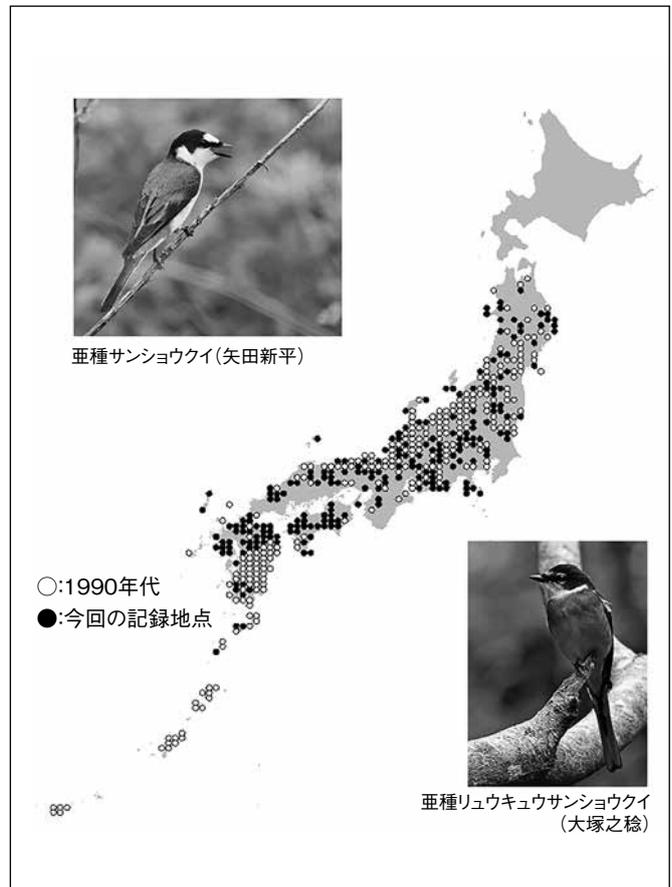


図2. サンショウクイの分布の変化

・北海道の相違

北海道で分布を拡げている種の上位種がオオアカゲラ、ヤマゲラ、クマガゲラといった「森の鳥」であるところは、森の鳥が増加傾向にあるという全国的な流れと一致していました。以前より伐採が減り、森林が成熟し、こうした鳥たちには良い状況になっているのだと思われます。ただ、全国の動向と違っている点もありました。例えば全国的には復活しているアカショウビンが北海道では減少していたり、同様に分布を拡げているハクセキレイが北海道ではやや減少したりしていました。ハクセキレイは、西へ西へと分布を拡げている種なので、西ほど新たにハクセキレイが記録されるようになったコースの割合が高く(図3)、すでに分布拡大が終わっている北海道は全国的な動向と違っているのでしょう。アカショウビンについてはよくわかりません。この相違の原因を考えることで、アカショウビンの復活の原因などわかるかもしれません。

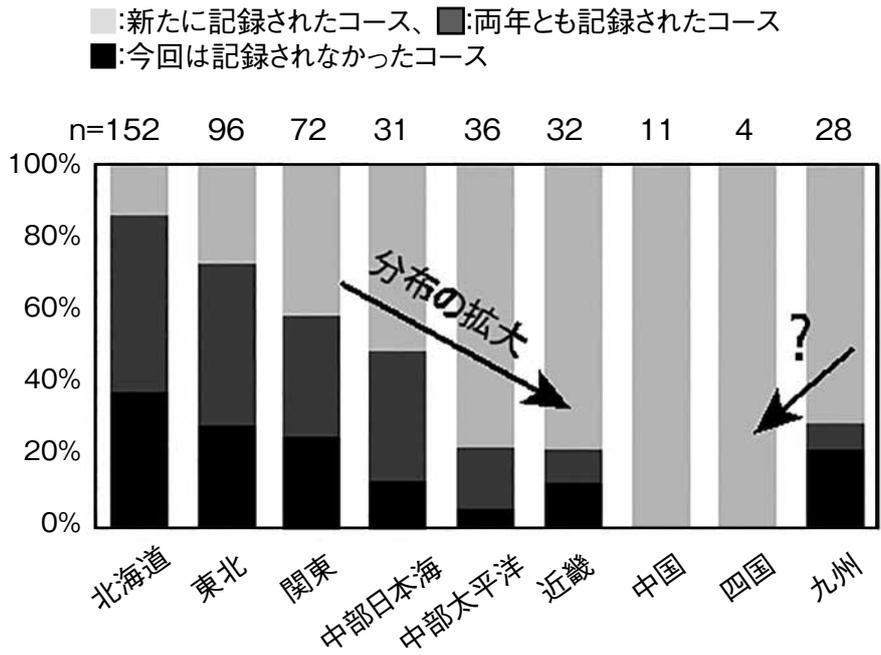


図3. ハクセキレイの記録状況の地域別の違い。西に行くほど新たに記録されたコースの割合が高く、西へ西へと分布を拡大している様子がうかがえる。九州は中四国より先に分布しているように見えるのは、朝鮮半島からも分布が拡がってきているせい?

調査へご参加ください

全国的に調査が進んでいるのですが、北海道は、広いだけに、まだまだ調査の終わっていないコースがたくさんあります。調査を終えることのできたコースが59%ありますが、まだ調査者が決まっていないコースも23%あるのです(図4)。現地調査は約3kmのコースのセンサスと2点の定点での観察を行ないます。「そこならできそう」という方はいらっしゃいませんか? また、現地調査だけでは、その地域にいる鳥を漏れなく記録することはできませんので、分布図を描くうえでは、普段の観察情報が重要です。そうした記録を登録するアンケート調査へもぜひご参加ください。参加いただける方は、以下のページより調査者登録をお願いします。

<https://db3.bird-research.jp/~birdatlas/volunteer.html>

みんなの力で、日本の鳥の今を明らかにしましょう。

全国鳥類繁殖分布調査

バードリサーチ・日本野鳥の会・日本自然保護協会  
 日本鳥類標識協会・山階鳥類研究所・環境省生物多様性センター

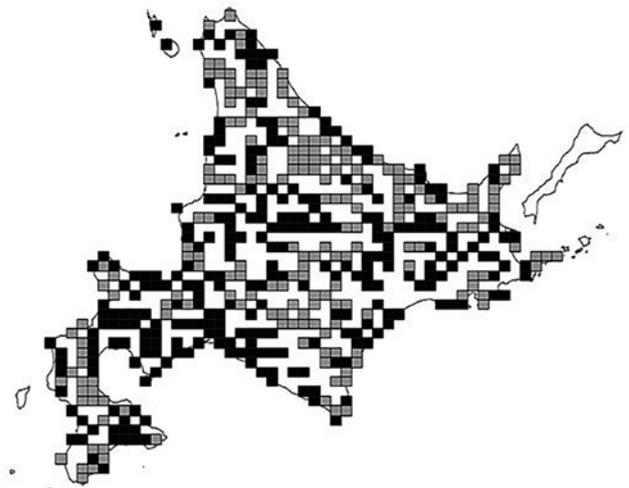


図4. 北海道の調査状況を示すメッシュ図

- 調査済みのコースを含むメッシュ
- 調査未実施のコースを含むメッシュ
- 調査コースが設定されていない場所

# ここまでわかった北海道のカワウの渡り

## —赤いリングが教えてくれたこと—

北海道カワウ研究会 会長 大館 和 広 副会長 渡 辺 義 昭

### 北海道カワウ研究会って何？

ほとんど誰にも知られていないと思いますが、2015年1月1日に北海道のカワウを調べたい極々僅かなメンバーで立ち上げた会です。ニックネームは北カ研（ほっかけん）、Hokkaido Kawau Kenkyukaiの各頭文字からHKKという安直な略称を付けています。

詳しくはこちら (<http://kitakawauken.jugem.jp/>) を参照してください。

### なぜ標識するの？

北海道のカワウは早春から晩秋にかけて道内各地で見ることができますが、冬の間は何処でどの様に過ごしているのか？現時点ではよく分かっていません。カラーマーキングすることにより、北海道で繁殖するカワウの越冬地を突き止めることに加えて、道内のカワウの動きを可能な限り正確に把握することを当面の最大の目標にしています。ゆくゆくは知られざる北海道のカワウの全貌を明らかにし、カワウと人とのより良い関係を構築できればと思っています。

北海道では過去にカワウの標識調査が行われたことは一度もないため、道内でカワウの捕獲ができる人を見つけることができませんでした。そこで、長年カワウの調査を続けておられるカワウ標識調査グループに指導を仰ぎ、2015年2月に千葉県市川市行徳鳥獣保護区で行われた標識調査に参加させていただき、捕獲から標識に加えてカラーリングの製作方法まで教わりました。同時に、北海道でのカラーリングの色を『赤に白文字』に決めていただきました。カワウに標識するリングの色は、日本鳥類標識協会のカラーマーキング・カワウ登録担当者（福田道雄氏）によって決められています。福田氏によると、赤色は長年秘蔵していた「とっておきの色」だそうです。カワウに使用されているカラーリングは地域別に異なる色が用いられており、赤色は過去に使われたが30年以上使用していないので問題ないとのことでした。赤はよく目立つため、できるだけ長期的な研究に使用することを考えて残してあり、日本の生息分布の中で北海道という地域の重要性から赤色使用を決定したとのことでした。

行徳の調査に参加して最も驚かされたのは、道内では認知度が非常に低いカワウが、カワウ調査の第一線で活躍されている方々の中では、北のカワウへの関心度がとても高かったことです。赤色リングには全国のカワウ関係者が強い関心を持っており、北カ研では恥ずかしい調査をせずに

息の長い活動続けることを肝に命じています。

### どこで標識しているの？

北海道にはいないことが当たり前だったカワウは、今では道内各地でごく普通の夏鳥になっています。北カ研では道内最初であり長年に渡って最大級のコロニーだった幌延コロニーで標識調査する予定で2014年から準備していたのですが、いざ本番という2015年の調査直前にカワウたちは幌延から忽然と消えてしまいました。この時点では北海道のカワウ標識調査は完全に頓挫し果敢自失になったのですが、後に湧別川河口付近の中洲に発見されたコロニーで翌2016年から標識調査を行うことができました。

### いつ標識しているの？

カワウの成鳥の捕獲は大変困難なので、巣内育雛中の雛を捕獲し標識します。北海道のカワウは3月下旬に飛来し5月下旬から巣内育雛することを確認しており、カワウの雛が大きく育ちつつも巣から動き回ることが十分に出来ない僅かな時期（20日齢前後）を狙って標識しています（写真1）。調査する人の都合と当日の天候の条件など調整が難しいですが、これまでの3年間は6月10日頃の週末に実施しています。



写真1. カラーマーキングされたカワウの巣内雛

### どうやって標識するの？

湧別川コロニーは川の中洲にあるため、ウェーダーを履いてカヌーを漕いで調査地に入ります。カワウの巣の多くが地上6～8m程度の高さにあるため、一本はしごやロープアクセス技術を用いて木登りを行って雛を捕獲しています。



写真2. 樹上でカワウを捕獲する様子

(写真2)。調査は樹上1～2名+地上2～3名を1チームとして編成しています。1名が樹上で捕獲した雛を大型の袋に入れて地上へ降ろし、地上では1名が雛を保定し、もう1名が右足に環境省の金属足輪を、左足に赤色リングの装着を行っています(写真3)。カラーリングは3方向から見える位置に白い文字で英字一文字と数字二桁を刻印しています。そして他の1名が記録やリングの管理を行います。その後、標識された個体を樹上の巣へ戻し、樹上の調査員は次の巣へと移動するという動作を繰り返します。



写真3. 地上でカワウにカラーマーキングする様子

コロニー内に長時間滞在すると雛の生存に悪影響が出るため、調査は数時間で終わりにしており、少人数での調査では一日に30羽程度の標識が限界のようです。

これまでに何がわかったの？

2016年から2018年の3年間に8名(延べ21名)の調査員によって、134羽のカワウにカラーマーキングを行い(表1)、これまでに11例の回収・観察記録を得ることができました(表2)。

表1. 湧別川コロニー・カワウカラーマーキング調査一覧(2016～2018年)

年	月・日	標識個体数	標識巣数	カラーリングナンバー(左足赤色)	調査人数	備考
2016年	6月10日	30羽	12巣	HKK・HK1～HK5・A00・A02～A07・A09～A14・A16～A24・A26～A27	5名	
2017年	6月17日	36羽	16巣	A28・A30・A32・A34～A39・A41・A43～A51・A53～A55・A57～A58・A60～A71	4名	他に金属足輪のみ標識1羽
	6月18日	26羽	10巣	A72～A75・A77～A99	6名	
2018年	6月9日	42羽	12巣	E00～E05・E07～E23・E25～E43	6名	
合計		134羽	50巣		8名 (延べ21名)	

表2. 湧別川コロニー・カラーマーキング調査 回収・観察一覧(2016～2018年)

カラーリングNo.	回収・観察場所	直線距離	経過日数	観察年月日	放鳥年月日	回収・観察情報	
1	A80	北海道湧別町サロマ湖	8km	142日	2017年11月7日	2017年6月18日	漁網混獲
2	A91	群馬県伊勢崎市島村	962km	185日	2017年12月20日	2017年6月18日	有害鳥獣駆除
3	A90	静岡県榛原郡吉田町	1147km	212日	2018年1月16日	2017年6月18日	保護後に放鳥
4	番号不明	北海道網走市藁琴湖	65km	349日 or 350日	2018年6月2日	2017年6月17日 or 18日	写真撮影
5	A46	湧別川コロニー	0km	365日	2018年6月17日	2017年6月17日	目視観察
6	A74	湧別川コロニー	0km	364日	2018年6月17日	2017年6月18日	目視観察
7	A79	北海道中川郡豊頃町トイトッキ沼	170km	439日	2018年8月31日	2017年6月18日	写真撮影
8	A22	湧別川コロニー	0km	663日	2018年4月4日	2016年6月10日	センサーカメラ撮影
9	A20	湧別川コロニー	0km	669日-720日	2018年4月10日-5月31日	2016年6月10日	センサーカメラ撮影
10	A55	湧別川コロニー	0km	721日	2018年6月1日	2016年6月10日	センサーカメラ撮影
11	番号不明(推定A)	愛知県西尾市西幡豆町	1187km	推定537日以上	2018年12月7日	推定2016年 or 2017年	目視観察

嬉しいと言うべきか！悲しいと言うべきか？記念すべきはじめての回収記録は湧別川コロニーから僅か8kmしか離れていないサロマ湖内に敷設した小型定置網による混獲でした。

発見者（漁業者）から湧別漁協経由で湧別町役場へ死骸が届けられ、その後に山階鳥類研究所と北カ研へ連絡が入りました。そして時系列では2例目となる記録が群馬県での有害鳥獣駆除による銃殺でした。さらに3例目の記録は静岡県で釣り糸が絡まって飛べなくなっているところを保護されたものであり、カワウという鳥が生き残ることの難しさを痛感させられました。その後、湧別川コロニーから直線距離で1187km離れた愛知県からも観察報告が届き、北海道のカワウが本州へと長距離移動していることが明らかとなりました。幼鳥は成鳥よりも移動分散する距離が長い可能性があるため、北のカワウの主要な越冬地が何処かはまだまだ不確かです。しかしながら、僅か3年の調査でゼロをイチにすることができ今後の活動への強い励みとなりました。

さらに2018年の湧別川コロニーでは、少なくとも5羽のカラーリング個体が戻っていたことが確認されました。野外観察で2個体とコロニー内に設置していたセンサーカメラによって撮影された3個体です。特に興味深かったのは、初年度に標識した3個体が繁殖羽を身にまとってコロニーに戻り、1個体は抱卵まで行っていました（写真4）。残念ながら孵化には至らず繁殖は途中で失敗しましたが、北カ研が関わった命が次世代を育もうとした姿に感動させられました。網に絡まって死んだり、銃で撃たれたりといった回収記録も大切ですが、出来ることなら私達が関わったカワウ達には長生きしてもらい、再会したいものです。

#### 赤いリングのついたカワウを探しています！

最後になりますが、赤いカラーリングが標識されたカワウを見つけた方は是非ご連絡をよろしくお願いします。

#### もしも赤いカラーリングのカワウを見つけたら…

1. カラーリングの番号を確認し、リングのある位置（右足か左足）を確認してください。（番号が確認できなくても貴重な記録なので報告をお願いします）
2. 可能であればカラーリング個体の写真撮影に挑戦してください。（番号が読める写真が撮れたら最高です！）リング個体の年齢や行動、周辺で見られたカワウの個体数も記録できればお願いします。難易度が高いと思われるかもしれませんが金属足輪の有無と番号および位置の確認に挑戦してみてください。
3. 記録できた情報を北海道カワウ研究会へお伝え願います！できるだけ正確な場所と日時を以下のメールアドレスへご連絡ください。

メールアドレス：kitakawauken@gmail.com

合わせて山階鳥類研究所へもご連絡いただくと大変助かります。

本来であればご報告いただいた方に謝礼をお渡ししたいところなのですが、北カ研には全く資金がないのですがどうかご容赦願います。それにしても…会長・副会長がいまだ一例の回収・観察記録を出せていないのは全く不甲斐ない限りです。努力が足りずもともと頑張らねばなりません。

#### 謝 辞

カワウの捕獲から標識、カラーリングの製作までご指導いただいた福田道雄氏、加藤ななえ氏、佐藤達夫氏、回収・観察記録をご報告いただいた皆様、カワウの標識調査に協力していただいた皆様、カラーリングの資金を提供していただいた北海道バンダー連絡会、カワウの回収記録の情報（データ利用許可番号：山階保全第30-125号）を提供していただいた山階鳥類研究所に心より感謝申し上げます。



写真4. センサーカメラが記録した抱卵中のA20個体（一部分を拡大して表示）

# 「石狩鳥報」に見る石狩野鳥社会の一端

札幌市北区 樋口孝城

北海道石狩振興局管内（札幌市、江別市、千歳市、恵庭市、石狩市、当別町、新篠津村）の年次野鳥記録をまとめている「石狩鳥報」（石狩鳥類研究会発行）は、1998年発行の「石狩鳥報1997」から始まり、現在では「石狩鳥報2018」（2019年2月発行）に至っています。「石狩鳥報1997」では資料などに残された、その時点までの過去の記録を整理するとともに、1997年の記録を加えました。その後、毎年記録を加えたものを発行してきました。

石狩鳥類研究会は、その年に記録された鳥の種類をまとめていくだけの組織です。現在の会員は50名以上いますが、会則も会費もありません。権利も義務もありません。それぞれの会員の普段の野鳥観察で見た鳥、鳥仲間から聞いた鳥、新聞などに掲載された鳥など、いろいろな情報を寄せ合っただけが活動です。

もう30年近くも前の1991年に日本野鳥の会北海道ブロック支部連絡協議会により編集された「北海道地域別鳥類リスト」には、石狩の野鳥として234種類が記載されています。「石狩鳥報2018」では337種です。まさか27年間に初めて石狩に飛来した鳥が100種以上ということではないことは容易に推察されます。鳥を見る人が少なかったこともあり、見たとしても、それを公表する記録が残されていなかったからです。ちなみに、石狩ではほぼ確実に初めてという鳥は、ここ10年間で10種に満たないくらいです。

野鳥の飛来状況の実際をすべて把握することは不可能です。かつてに比べて野鳥観察人口は随分と増えているようですし、デジカメなどの発達から、写真や動画などの具体的な証拠も残される時代になりました。でも実際の飛来のどこまでを捉えているかはわかりません。ともかくも記録を集めてあれこれ言うことしかできません。

初めての鳥、珍しい鳥については、だいたい大きな話題となりますが、多くの場合は一過性の賑わいだけで終わってしまいます。減った鳥については、それが人気鳥であったり、鳥社会の象徴的なものであったりすると話題になりますが、人知れずいなくなってしまう鳥もいそうです。

表1には、ここ四半世紀近くの中に石狩では記録されなくなってしまった鳥、反対によく記録されるようになった代表的な鳥の記録を載せています。こうして並べてみると一目瞭然です。参考までにエゾライチョウも載せましたが、ずっと続いていた記録が2018年に途切れてしまいました。次年復活が十分予想されますが、ちょっと心配なところです。

よく記録されるようになった鳥のうち、カワウ、ミヤマガラス、カササギは、個体数増加をみても、すっかり定着したようです。他は個体数が特に増加した感じはなく、今後どうなるかは、まだ見続けていかなくてはなりません。

もう一つ年次記録からのものです。石狩で記録がある337種について、最近10年間のうちの記録年数で分けたものが図1です。10年間すべて記録があるものは全体の約55%の186種です。これと、毎年近く（9～8年）記録されるものが、石狩鳥社会の主要メンバーです。たとえばスズメのように数多く見られるものから、ハヤブサのように数は少ないけれども年間でみれば、まずは見られるものまで様々ですが、いわばこれらが石狩の「いつもの鳥」です。

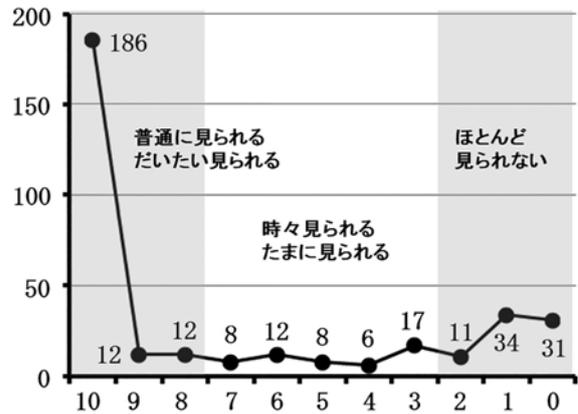


図1. 最近10年間の記録年数別の種類数

長い年月の間には、表1から読み取れるように、「いつもの鳥」から外れるもの、逆に仲間入りするものがあります。個人的には後者の方に大きな興味があります。その背景には何があるのでしょうか。それぞれの鳥にそれぞれのドラマがあるような気がします。

なお、「石狩鳥報2018」に掲載の年次記録（最近10年間）については、北海道野鳥愛護会ホームページのリンク集から「石狩鳥類研究会」に進むとpdfで見ることができます。

表1. 記録されなくなってしまった鳥、記録されるようになった鳥

年	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18
アカショウビン	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
シマアオジ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ゴイサギ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
エゾライチョウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カワウ					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ミヤマガラス					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カササギ									●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ヘラサギ													●		●		●			●	●	●	●	●
ノハラツグミ															●					●	●	●	●	●
ホシムクドリ					●											●				●	●	●	●	●

## ロシア極東・鳥紀行 (4)

美唄市 藤 卷 裕 蔵

### さらに北へ

1997年7月にサハ共和国(旧ヤクーチヤ自治共和国)のレナ川中流域でオオハクチョウの日回共同調査が行われ、私はこれに参加した。この調査の目的は、レナ川流域で繁殖するオオハクチョウに衛星追跡の発信器を装着し、渡りのルートと越冬地を明らかにすること、それにオオハクチョウが繁殖する環境を調査することである。

これまで衛星追跡の発信器による研究で、冬日本に渡来するオオハクチョウはサハ共和国東部のインジギルカ川とコリマ川の間で繁殖していることが明らかになっている。ロシアの研究者によると、最近この地域で繁殖するオオハクチョウが増加しており、同じ地域で繁殖するマガンなどを圧迫しているほどだという。一方、レナ川中流域では生息環境に変化がないにもかかわらず、生息数が1980年頃から急激に減少し始め、その傾向が現在も続いている。そのため、この地域で繁殖するオオハクチョウがどのような渡りルートを飛び、またどこで越冬するのかを明らかにしたいということが課題となっていた。

コハクチョウがツンドラ帯で繁殖するのに対し、オオハクチョウはそれより南の森林帯で繁殖する。私たちが調査に入ったレナ川中流部は、オオハクチョウの繁殖分布域の北部になり、北緯64度35分、カムチャツカのクロノツキー生物圏保護区よりさらに10度ほど北になる。

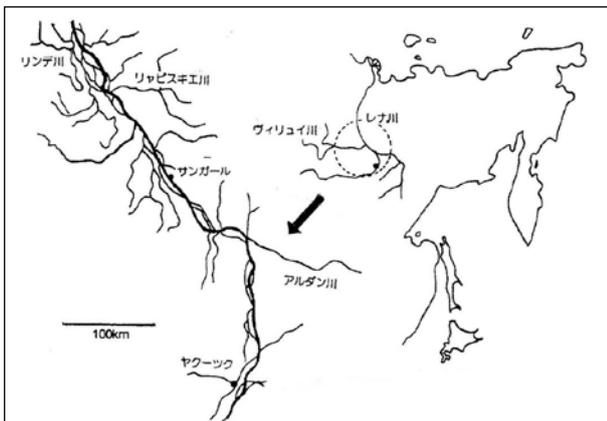


図3. 訪れた場所の位置図。太線はレナ川本流。調査基地のスィア・ベレゲル島は右岸支流リャビスキエ川が合流するあたりにある。

### ヤクーツクへ

日本からこの調査に参加したのは、調査を担当する日本白鳥の会と日本野鳥の会から4人、現地視察が目的の日本白鳥の会員4人の計8人である。

私たちは7月13日に新潟空港を立ち、1日目はウラジオストクまでである。直行便がないので、ここで1泊し、翌14日夕方にサハ共和国の首都ヤクーツクに到着した。空港に着陸するときレナ川やヤクーツクの市街地がよく見えた。レナ川の川幅はかなり広く、川沿いは濃い緑色をした森林と黄緑色の草原である。また市街地の周辺は一部が農耕地になっているだけで、大部分は草原である。

ここへは観光ビザで来たため、調査地域にはいるためには新たにビザが必要で、その手続きの間、市内見学をした。市内の大部分は4階のコンクリートの建物であるが、街外れになるとまだ木造の平屋が見られた。この地域は永久凍土帯なので、古い木造建築を除くと建物は全て高床式で、地上1~2mはコンクリートの柱だけである(写真15)。建物を直接地表に接して建てると、凍土が融け建物が傾いてしまうからだという。このほか、普通なら地下に埋設されるような暖房用の配管も地上にあり、道路を横切る部分は陸橋状になっている。

街中で見かける人々も多くはヤクーチヤ族で、日本人とよく似ている。これまで見てきたロシアの他の地域とはだいぶ違うと思った。



写真15. ヤクーツク市内の高床式建物

### 調査地へ

調査地は、レナ川沿いのヴィリュイ川合流部からその下流部のリンデ川合流部までの115kmの範囲であるが、詳しく調査したのは両合流部の中程にあるウスチ・ヴィリュイ保護区である(図3で、右岸支流リャビスキエ川とレナ川の合流部付近)。到着2日目はヤクーチヤ生物学研究所で調査打合せと市内見学、7月16日の午後に船で調査地に向けヤクーツクを出発した。調査隊は、日本からの8人とサハ共和国からヤクーチヤ生物学研究所の研究者3人が加わり、計11人である。

船は「カーチェル」と言われる中型船で(写真16)、キッチンやトイレのほか、船首と船尾に部屋があり、それぞれ4人くらいが寝ることができる。往路では調査隊と船の乗組員とその家族4人、計15人が乗船していたが、それに十分な大きさである。レナ川ほどの大きな川を航行するには、このくらいの船が必要なのであろう。



写真16. 調査に用いた船

調査基地は、ウスチ・ヴィリユイ保護区の中洲の一つ、スィア・ベレゲル島で、ここで新たに保護区のレンジャー3人が調査隊に加わった。ここは首都のヤクーツクから直線距離にして約350kmになる。残念ながらこの保護区には古い小屋があるだけで、大きな管理事務所はまだ建設中で、土台しか出来ていなかった。そのため、調査期間中は川岸に停泊している船が宿泊所になった。私は船室で寝たが、他の人は船室か操舵室の上でトナカイの皮を敷いて寝袋で寝たり、一部の人は川岸にテントを張って寝た。

### 森林と草原

調査地への移動中に見た景色は、川沿いにある小規模の市街地を除くと森林と草原で、所々に湖がある。森林は、落葉広葉樹林、常緑針葉樹林、カラマツ林、またこれらの樹種の混交林である。常緑針葉樹はトウヒの一種であるが、北海道で見るエゾマツやアカエゾマツに比べると樹形は細長く、先端が鋭く尖っている。

レナ川はユーラシア大陸でも大きな川の一つで、その長さもさることながら、中流部でも幅広い所ではいくつにも分流し、中洲が多い。1/20万の地形図で見ると、調査基地あたりでは川幅は25kmにもなる。これは札幌市の中心部から恵庭市までの距離に相当する。中洲の大きさや環境は様々である。冠水しないような所ではトウヒの林、ときどき冠水するとおもわれるような所はヤナギ類を主とする落葉広葉樹林や灌木・草原になっており、砂地だけの中洲もあり、所によっては増水時に運ばれた土砂が高さ1~2mの山のようになっている。調査地への途中、ヤクーツクに近い中洲に上陸したが、半野生馬が生息していた。サハ共和国はトナカイで有名だと思っていたが、ウマの国であることをここに来てから知った。そういえば、市内見学で訪れた博物館にはウマに関係のある展示品が多かったし、夕

食後の懇談の席で歌われたヤクーチヤの民謡は、日本の民謡の節まわしに似たウマの歌であった。

### オオハクチョウ探し

調査の第一歩はオオハクチョウ探しである。調査基地到着前の17日、ヤクーツクの北約250km北にある町サンガルの空港から複翼機AN-2で飛び立ち、川沿いに北上した。空中調査では高度200mで飛んだが、オオハクチョウらしい白い鳥はなかなか見つからない。14:40~17:20(現地時間=日本時間+1時間)の飛行で発見できたのは3か所で、1、2、2羽、計5羽だけであった。越冬地で見ているオオハクチョウからは想像もつかないほどの低い密度である。

翌18日にさらに北上し基地に到着。早速、オオハクチョウ探しである。空中調査で見つけたオオハクチョウのいた沼は基地からかなり遠く、細い支流をボートで行ける所まで進んでもさらに3kmほど歩く必要がある。それに沼で捕獲するためにゴムボートを運ぶ必要がある。調査に要する労力を考慮すると、ここでの捕獲をあきらめざるをえなかった。そこで基地に近い沼のある中洲をいくつか調べることにした。

3班に分かれ、船外機付きのボートで沼のある中洲めぐりである。中洲は数多く、ボートから見る中洲の景観はどれも同じように見え、まるで迷路に迷い込んだようで、土地勘があっても迷子になってしまうことがある。21日に私の班は13:30に出発し、17:00に基地に戻った。ところが、一つの班は迷ったようでなかなか戻って来ない。雨が降りだし、心配は次第に大きくなって来るが、通信手段がなく、ただ待つだけの時間を過ごした。やがて戻ってきたのは21:15であった。

悪天候で波の高かった20日を除き、22日まで調査したが、中洲の沼の一つで、空中調査で見られなかった1羽を見つけることができただけである。しかも、換羽期だというのに飛翔できるのである。オオハクチョウの換羽期は長く、70%くらいは換羽のため飛べないが、あとは飛翔できるとのことであった。これでは捕獲は困難である。

川沿いの調査地115kmの範囲で観察できた個体数は、空中調査の5羽、その後の調査で見つけた5羽の計10羽であった。生息数が少ないとは聞いていたが、これほどとは思ってもいなかった。当初の目的である送信器の装着はできなかったが、オオハクチョウの繁殖地の環境を自分の眼で見ることができたのは、大きな成果であった。

### その他の動物

生物学研究所はヤクーツク市街地の周縁部にあり、灌木・草原が優占する環境で、この周辺ではアマツバメ、イソシギ、アリスイ、アカモズ、ハシボソガラス、シベリアセンニュウ、スズメ、イエスズメ、ハクセキレイが観察された。

調査地へ向かう途中に上陸した中洲は、おもに灌木・草原の環境であった。ここではイワツバメ、シベリアセンニュウ、シマアオジ、カシラダカが観察されたほか、川ではユリカモメ、ヒメカモメ、ハジロクロハラアジサシが飛んでいた。

調査基地とその周辺で観察されたのは、マガモ、キンクロハジロ、キジバト、アオサギ、オオバン、オグロシギ、アオアシシギ、クサシギ、ソリハシシギ、イソシギ、ユリカモメ、ヒメカモメ、セグロカモメ、アジサシ、トビ、オジロワシ、アカオカケス、ホシガラス、マキノセンニュウ、ウソで、中でもアカオカケスは初めて見た鳥だし、多くのヒメカモメがいつも船のまわりを飛回っていたのが印象的であった。

哺乳類では、オオハクチョウ探して上陸した中洲で、ヒグマとオオカミの足跡を何回も見ることができた。

網をしかけて捕った魚は食糧になるが、捕獲されたのはチョウザメ、オークニ（カワスズキ）、カワカマスなどの淡水魚で、獲物の中ではカワカマスの93cmが最大であった（写真17）。川が大きいだけあって、生息している魚も大型である。



写真17. 最大級のカワカマス



写真18. 蚊の大群

### 懐中電灯のいない夜

調査中で悩まされたのは、蚊の多さである。ボートが動いている間はよいが、止まるとすぐに蚊が集まってくる。また、森林の中に入ると風がなくなるので、たちまち蚊の大群に囲まれてしまう。前の人の背を見ると背中全体に蚊がビッシリと止まっている（写真18）。それも日本で見られるものより大型である。ここでは防虫ネットも虫除けスプレーもあまり役に立たなかった。手には手袋、頭にはアノラックのフードをかぶり、隙間から蚊が入らないようにして、あとは顔の前で絶えず木の枝を振って追い払うのが最も有効であった。

面白いことに、集まってくる蚊をトンボが食べにくる。やや大型のトンボで、まるで人を攻撃するかのような勢いでアノラックのフードにぶつかってくる。蚊の多さもトン

ボの攻撃も初めての経験であった。

初めての経験のもう一つは、懐中電灯を必要としない夜である。太陽が沈むのは23:00頃であるが、日没後にも薄明が続き、そのうちまた太陽が顔を現すので、夜中でも真っ暗になることがない。雲の多い日には夕焼けがそのまま朝焼けとなる。高緯度地方では夏に白夜になるということは知ってはいたが、単に夜が明るいというだけではなく、天候次第でいろいろに変わる白夜を見ることができた。しかし、困ったのはいつまでも明るい、なかなか寝つけないことである。ロシア側の隊員はこのようなことに慣れているのか、時間になれば寝るし、朝起きてくるのも9:00頃であった。

また、気温の変化が著しい。天気の良い日の日中には30℃近くになるのに、曇って風が吹くと、寒いくらいとなる。これも高緯度地方の特徴の一つなのだろうと思った。

### 自然の広大さ

調査基地までの往路は寄り道をしながら船でゆっくりと北上したが、復路は大型ヘリコプターMI-8で調査基地からヤクーツクまでを一気に飛んだ。調査ではなかったので、機はかなり高くを飛行した。この間、下に見えたのは森林、草原、湖、川が組合さった環境であった（写真19）。オオハクチョウの繁殖地の自然を上空から一望でき、復路は調査を終了した後のすばらしいひと時であった。



写真19. オオハクチョウの繁殖地の環境

ヤクーツクに近くなってやっと草原にキタビラの跡が見えたくらいで、調査基地を飛立ってからずっと同じような環境が続いており、農耕地のような人手が加わったと思えるような所は見られなかった。調査基地からヤクーツクまでは直線距離で約350km、北海道では宗谷岬から襟裳岬までの距離に相当する。この間同じような環境が続いているわけで、日本には想像もできない規模である。サハ共和国自体が日本の4倍もの面積をもつので、その中の自然も大きな広がりをもっているであろう。レナ川の川幅を知ったときもそうであったが、自然環境の広大さに改めて圧倒されるおもいであった。

(つづく)

# 野鳥



## 情報コーナー

### 濤沸湖にて ハジロクロハラアジサシ47羽の記録

網走市 渡辺 恵

2018年5月23日～25日、網走市と小清水町の境界線にあたる濤沸湖平和橋で、ハジロクロハラアジサシの大群を観察したので報告します。

2018年5月23日15時40分～18時05分。平和橋に着くと黒っぽいアジサシ類の群れが目に入り「ん？あれ？まさか！？」よく見ると、成鳥夏羽のハジロクロハラアジサシ47羽が乱舞していました。湖上を慌ただしい飛翔で行ったり来たりし、時々水面付近で採餌している様子でした。私は強風の中なんとか高倍率ズームのコンデジで撮影しました（写真1、写真2）。18時、群れがまとまって空高く上昇し海上方向へ飛んでいったので、もう去ったと思われました。

5月24日15時20分～15時50分。激しい雨の中で平和橋に行ってみると、ハジロクロハラアジサシ成鳥夏羽24羽を確認しました。ショウドウツバメ130羽程と同じように水面付近で採餌している様子でした。私はいったん平和橋から離れて用事を済ませ、17時頃にもう一度平和橋に行くと、1羽も確認できませんでした。

5月25日6時30分～7時。前日まで出張中だった夫と平和橋に行ってみました。ハジロクロハラアジサシの姿は確認できませんでした。「夕方行ったらいるかな？」と思い再度15時40分に行ってみると、成鳥夏羽8羽を確認しました。この日も雨で、ショウドウツバメたちと同じように水面付近で採餌している様子でした。

当時の天候を気象庁のデータでみると、5月23日の小清水町は最高気温29℃と夏日で、最大風速は南14.5m/s、観察時の風速は南南東8.7m/sでした。南風が強かった時に入り、その後の悪天候で滞在したのかもしれませんが。

過去のハジロクロハラアジサシの20羽以上の記録は、東京都硫黄島の2000年5月14日24羽（時田・渡辺 2001）と、大阪府大阪市此花区夢洲地区の2005年8月14日23羽、8月17日21羽（大西敏一 私信）と、鹿児島県天城町徳之島空港の2011年5月30羽あまり（天城町文化遺産データベース）でした。なお、ハジロクロハラアジサシは現場でも撮影した画像でも確認できませんでした。

過去の記録について大西敏一氏、先崎理之氏よりお教えいただき、感謝申し上げます。



写真1. ハジロクロハラアジサシの群れ 2018.5.23 濤沸湖



写真2. ハジロクロハラアジサシの群れ（拡大図）

#### 引用文献

時田賢一・渡辺義昭 2001. 硫黄島鳥類目録（1999年10月-2000年8月）. 我孫子市鳥の博物館調査研究報告 9 : 35-45.

天城町文化遺産データベース.

[http://jmapps.ne.jp/amagi/det.html?data\\_id=5762](http://jmapps.ne.jp/amagi/det.html?data_id=5762)

参照2018. 12. 10



## 野幌森林公園

2018. 12. 2

【記録された鳥】トビ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、キバシリ、ムクドリ、マミチャジナイ、ツグミ、シメ 以上18種

【参加者】阿部 徹、今村三枝子、岩井幸子、大表順子、大垣 創、大本博之、蔵谷徳広・彩香・優成・じんな、栗林宏三、小西美美枝、近藤章子、坂井柊紀、佐藤香織、品川陸生、鈴木勝之、辻 雅司、富川 徹、長尾由美子、長野隆行、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、平岡信夫、藤吉 功、辺見敦子、松原寛直・敏子、村田恵一、本杉政司・朋子、山本育子、横山加奈子、吉田慶子 以上35名

【担当幹事】中村 隆、早坂泰夫



探鳥会で観察されたホオジロガモ 撮影：平岡信夫さん

てきました。鈍色（にびいろ）の海に漂うホオジロガモとスズガモの群れ。そこに重なる雪片が、心にも降り積もるかのような光景でした。

30年ぶりの探鳥会。バスの中でうとうとしていたら、あつというまに札幌駅到着です。帰路、余韻忘れがたく蕎麦屋でビール二杯。

## 鈍の海とりを数へて息白し

【記録された鳥】マガモ、スズガモ、シノリガモ、クロガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、アビ、シロエリオオハム、ヒメウ、ウミウ、アオサギ、ウミネコ、カモメ、ワシカモメ、シロカモメ、オオセグロカモメ、ウミスズメ、トビ、オジロワシ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、スズメ、カワラバト（ドバト） 以上28種

【参加者】池田早苗、池端耕治、今村三枝子、白田 正、太田由美子、岡部良雄・三冬、北山政人、國本昌秀、栗林宏三、近藤章子、志田博明、品川陸生、謝 倩氷、鈴木幸弥、高橋宣子、高橋貞夫、高屋敷征子、富樫由依、中田勝義、長野隆行、温井日出夫・潤子、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、平岡信夫、松原寛直・敏子、村田恵一、本杉政司・朋子、柳田純子・力輝、山下節子、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子 以上39名

【担当幹事】北山政人、栗林宏三、畑 正輔

小 樽 港  
2019. 1. 20  
札幌市中央区 國本 昌秀

会員歴40年ほどになりますが、探鳥会に参加するのは実に30年ぶりです。小樽は思い出深く、鳥を見ずに二次会（居酒屋での飲み会）だけに、妻と幼児を連れて参加したこともあります。鳥にわくわくした青年期、ご無沙汰した壮年期、そして探鳥に還ってきた今。幸せな巡り合わせを感じます。

今回の探鳥地は日和山灯台、祝津漁港、高島漁港、フェリーターミナル、北浜岸壁、港町埠頭の六ヶ所でした。日和山灯台は小学生のころ、海水浴帰りに母が「見せて下さい」と、扉を開けた懐かしい場所です。今回、ここから観察できた海鳥は少なかったのですが、トドが出ました。南下してきた野生の個体を見るのは初めてで、少し興奮しました。悠々と泳ぐトドを間近に見ての一句。

## 大寒の日本の海ぞトド吠ゆる

そう、この日は大寒でした。が、風もなく穏やかな鳥見日和。色彩が美しいなと思ったのはシノリガモとウミアイサ。姿の面白さはカンムリカイツブリです。十数羽で浮き寝していましたが、首を伸して海面を、ささっと駆けていきました。オジロワシの威風堂々とした体躯や、ワシカモメの優しげな眼差しも臉に刻まれました。

最終ポイントの港町埠頭に着く頃には、雪が静かに落ち

野 幌 森 林 公 園  
2019. 2. 3

【記録された鳥】トビ、コゲラ、アカゲラ、クマガラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ、アトリ 以上14種

【参加者】阿部 徹、板谷輝美、今村三枝子、大朝暁子、大表順子、加藤正樹、小西英美枝、近藤章子、品川陸生、白尾悦子、白澤昌彦、高橋貞夫、鶴見昌法・江里子、長野隆行、中村 隆、中山厚志、野村美千代、畑 正輔、早坂

泰夫、美頭佳範、古川康花、辺見敦子、松原寛直・敏子、横山加奈子  
以上26名

【担当幹事】早坂泰夫、松原寛直

## 宿泊探鳥会(春の礼文島)のお知らせ

今年の宿泊探鳥会は、礼文島で、春に渡ってくる野鳥を観察します。年によって違いはありますが、この時期は、カラフトムシクイ、キマユムシクイなどのムシクイ類、マミジロタヒバリ、セジロタヒバリなどのタヒバリ類のほか、ヒタキ類やホオジロ類が見どころです。また、ケアシノスリをはじめ、運がよければハイロチュウヒ、マダラチュウヒ、アカアシチョウゲンボウ、コチョウゲンボウなどの猛禽類も期待できそうです。フェリー航路からは、カモメ類のほかに、アビ、オオハム、シロエリオオハム、ハイイロミズナギドリ、ハシボソミズナギドリなどの海鳥も楽しみです。

月 日 5月17日(金)～19日(日)

### 行程内容

- 1日目 札幌駅北口(7:30発)→昼食→稚内港～(フェリーで礼文島へ)～香深港→香深周辺で探鳥→ホテル礼文(泊)
- 2日目 ホテル礼文→緑ヶ丘キャンプ場・久種湖畔などで探鳥→昼食(澄海岬でお弁当)・スコトン岬・金田ノ岬で探鳥→レブンアツモリソウ群生地→ホテル礼文(泊)
- 3日目 ホテル礼文→桃岩周辺で探鳥→香深港～(フェリーで稚内港へ。昼食はお弁当)～稚内港→札幌駅北口(20時頃帰着)  
(詳細のご案内は5月上旬に発送致します。観察する鳥の出方や気象状況により一部行程が変わる場合があります)

定 員：45名(最少催行人員 38名)38名に満たない場合は旅行を中止することがあります。その場合は4月25日までにお知らせし、お支払いいただきました旅行代金を返金致します。催行中止の連絡がない場合は催行確定です。

参加費用：50,000円

集合から解散までの貸切バス代等交通費：バス代(貸切)、フェリー代(2等船室)宿泊代(男女別相部屋)、食事代(1日目の昼食から3日目の昼食まで)

宿 泊：ホテル礼文(温泉♨)

申込受付：4月1日(月)午前9時から電話受付致します。 ☎011-303-2660

担当：佐々木(宿泊探鳥会担当幹事)

※午前中は電話が混み合い、お待ちいただくことがあります。話し中でも、『ツーツー』というお話し中の音は発せられません、受付しておりますので、お架け直し願います。

※eメールでも受付をいたします。

eメールアドレス：sasaki-sr@hbcv.jp

旅行代金：申込み後 10日以内に旅行代金を下記口座にお振込みください。

北洋銀行札幌駅南口支店

口座名(株)エイチ・ピー・シー・ビジョン  
口座番号(普通預金口座) 3790202

取消規定：ご都合により参加のお取消をされる場合は下記の取消料を申し受けます。

4月26日(木)～5月10日(木)

旅行代金の20%

5月11日(金)～14日(月)

旅行代金の30%

5月15日(水)～17日(木)

旅行代金の50%、

旅行出発後

旅行代金全額(払戻金はありません)

《重要》 このたびの宿泊探鳥会では、稚内～香深(礼文島)間のフェリーを利用いたします。天候等の事由などにより乗船予定のフェリーが欠航した場合は、宿泊費・食事代、および貸切バスの追加代金が発生する場合があります。その場合は参加されるお客様の負担となりますことをご了承のうえご参加願います。

## 鳥民だより

### ◆ 野鳥写真展と写真募集のお知らせ

会場：札幌エルプラザ 1階 情報センター  
 (札幌市北区北8条西3丁目)  
 JR札幌駅地下直結または北口出口の北向い  
 期間：2019年5月8日(水)～5月21日(火)  
 展示時間：9:00～20:00

(ただし初日は17:00から、最終日は16:00まで)

応募要領：写真は、最近3年以内に原則として北海道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はA4版。鳥の名前・撮影者・撮影年月・撮影場所を必ず添付してください(原則としてお一人2枚以内とします。3枚以上の場合は展示優先順位を明記してください)。

募集締切：4月30日(火)までに、下記の愛護会事務所に送付または持参してください(必着)。

(〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5  
 6階 自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会 宛て)

#### お願い事項

写真展に出展された作品を、愛護会ホームページに掲載いたしますので、お手数ですが、JPEGデータを下記までMail添付にてお送り願います。  
 総務 辻幹事：E-Mail： mtsuji@eagle.ocn.ne.jp

準備・展示作業：5月8日(水)13:00から事務所にて額付・キャプションを作成し、引き続き15:00から会場にて展示作業を行います。

お手すきの方はご協力をお願いします。

\*なお、引き続き野幌自然ふれあい交流館で6月に1ヶ月間の展示を計画しております。

【お問い合わせ】 畑 正輔 (011-894-0017)

### ◆ 総会のご案内

日時：2019年4月10日(水) 18:00～  
 場所：かでの2・7 110会議室(1階)  
 (札幌市中央区北2条西7丁目)  
 ※総会終了後に懇親会を予定しています。  
 【お問い合わせ】 畑 正輔 (011-894-0017)

### ◆ 新刊紹介◆

「極東の鳥類35A」 論文集 ロシアのシマアオジ  
 藤巻 裕蔵 訳・編 極東鳥類研究会

【体裁・価格】 B5版、28ページ、300円

【内容】 極東鳥類研究会から「極東の鳥類35A」として発行されたもので、ロシアの鳥類相などに関する著書・論文・報告書からシマアオジの部分を抜粋して和訳したものを収録しています。2018年に開催された第一回ロシア鳥学会講演要旨集のうち、シマアオジに関する発表の要旨の和訳も収録しており、ロシアにおける最近のシマアオジの状況についても知ることができます。集録した和訳は30編です。なお、本書はエコネットワーク(札幌市北区北9条西4丁目エルムビル8階 TEL011-737-7841)で取り扱っています。

#### 【新しく会員になられた方々】

藤田 正樹・仁子 (札幌市南区)  
 藤吉 功 (札幌市厚別区)  
 中山 厚志 (長野県佐久市)  
 田中 克憲・文子 (札幌市白石区)  
 他1名(匿名希望)

#### 表紙の鳥

#### ハイイロチュウヒ



厚真町の海岸線で、鳥見をしながらゆっくりと車で走行していると、遠くでヒラヒラとした鳥が見えた。望遠鏡で確かめるとハイイロチュウヒだ。その場で車を停めてカメラをセットして飛来して来るのを待った。小雪の降る中、思うままに写真が撮れた。

新城 久(札幌市北区)



- 探鳥会 (宿泊探鳥会を除く) は、どなたでも参加できます。参加費無料。事前申し込み不要です。直接、現地に集合してください (昼食、双眼鏡等の観察用具、筆記具等をご持参ください)。
- 集合場所等については、愛護会ホームページ「探鳥地紹介」でお確かめください。
- いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します (小雨決行)。
- 探鳥会の開催を変更・中止する場合がありますので、愛護会のホームページでお確かめください。
- 交通機関の運行時刻等については、最寄りの営業所等にお問い合わせください。

【探鳥会の問い合わせ】

北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 10:00~16:00 (土・日曜日、祝日を除く)

開催日	探鳥地	集合場所及び集合時刻
4月14日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前 9:30
	中央バス：地下鉄東豊線環状通東駅発 (北札幌線東69番・東79番) 「モエレ公園東口」下車、徒歩15分。開水後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原や公園林の小鳥類を楽しみます。	
4月21日(日)	宮島沼	湖畔 10:00
	中央バス：岩見沢ターミナル発 (月形行) 又は月形駅発(岩見沢行) 「大富農協前」下車、徒歩10分。北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。暖かい服装で。	
4月28日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	夕鉄バス：新札幌駅発(文京台南町行)「大沢公園入口」下車、又はJRバス：新札幌駅発(文京台循環線)「文京台南町」下車、徒歩各5分。夏鳥たちが渡ってくる時期です。木々の芽が開き始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
5月5日(日)	藤の沢	白鳥園 (エルクの森パークゴルフ場向い) 9:00
	定鉄バス：札幌駅又は地下鉄真駒内駅発 (定山溪温泉行又は豊滝行) 「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。藤の沢小鳥の村とその周辺をウグイスやオオルリなどの声を聞きながらゆっくりと巡ります。	
5月6日(祝)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	4月28日の案内を参照してください。 木の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月12日(日)	千歳川	さけますふ化場手前の橋付近の広場 8:00
	公共交通機関はありません。 千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさんの夏鳥が見られます。ヤマセミが出現することもあります。	
5月17日(金)	礼文島	札幌駅北口 7:30
5月19日(日)	宿泊探鳥会 会員限定 定員45名 詳細は本誌14ページ参照	
5月26日(日)	鶴川河口	むかわ温泉四季の館駐車場 9:45
	道南バス：札幌駅又は大谷地バスターミナル発 (浦河行/ベガサス号) 「四季の館前」下車。鶴川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。時にはチュウヒヤハヤブサも現れます。	
6月2日(日)	野幌森林公園	大沢口 6:00
	早朝のため公共交通機関はありません。 早朝探鳥会です。夏鳥の囀りを聞きながら早朝の森を歩きます。春の草花も真っ盛りです。	
6月9日(日)	厚別川	川下公園駐車場 9:00
	中央バス：地下鉄東西線白石駅発 (川下線白24番) 「川下公園」下車。厚別川の堤防を歩きます。草原の鳥が勢揃いし、林の鳥たちも楽しめます。	
6月16日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前 9:10
	JR千歳線「植苗」下車。 鳥の囀りを聞きながら植苗駅からウトナイ湖へ向かいます。道沿いの森や湖畔草原の鳥たちを楽しみます。	
6月23日(日)	福移	福移小中学校前 9:00
	中央バス：地下鉄環状通東駅発 (北札幌線) 「福移小学校通」下車、徒歩5分。石狩川堤防内外の草原や、石狩川・豊平川合流点で草原の鳥たちを楽しみます。	
6月30日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	4月28日の案内を参照してください。 鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人 2,000円、家族 3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <http://aigokai.org>